

## はしがき

本報告書は、「2015年SSM調査報告書」の第1巻にあたり、2015年SSM調査の方法および方法論に関わる論文を所収している。最初の白波瀬論文は、本調査の調査概要を示すものであるが、調査方法やデータの概要にとどまらずSSM調査の伝統と2015年調査の新機軸という調査理念についても語られている。続く三輪・前田論文は、調査不能や項目無回答といったデータの欠損についての分析である。予備対象の影響や基本属性の偏りについて2005年調査と比較しながら詳細な分析結果が示されている。一方で、高田論文は、社会調査への非回収について新しい見方を提供している。社会調査への応答を社会参加の一種と考え、非回収の存在が社会意識の分析に与えるバイアスの推定を試みている。高橋論文は長年取り組んでいる職業コーディングの研究のなかからとくに管理職を特定することの難しさに焦点を置いた研究である。管理職コードの付与が暗黙の複雑な法則にのっとってなされていることを明らかにし、実情に即したルールを明示する必要性を訴えている。菅澤論文は、傾向スコア・マッチング法を用いることで大学中退が職業移行に及ぼす影響をできる限り正確に測定しようとしたものである。同じように少人数のサンプルしか確保できない対象についての応用が期待できる方法である。続く保田論文と香川論文は、いずれも系列データとしての職歴データの分析をテーマとしている。保田が基礎集計の方法を提唱しているのに対して、香川はより多様な視点から系列データを測定する方法を紹介しており、具体的に若年期のライフコースの変化をカラフルなグラフを駆使して表現している。職歴データはSSM調査の中心であり、さらに方法論的な議論が広がることを期待したい。続く2つの論文は、データ・クリーニングを扱った研究である。2015年SSM調査では、クリーニング方法について従来よりもシステムティックな手続きを取る新しい試みがなされた。菅澤・保田論文は、クリーニングの記録からエラー傾向の分析を行ったものである。今後のSSM調査の調査設計や調査員管理のあり方を改善する知見を探っている。また、保田論文は、使用したクリーニング・システムの特徴や開発過程を整理したものである。SSM調査に限らず複雑性を増すクリーニング環境の改善に役立つことが期待される。最後の白波瀬・竹ノ下・田辺・永吉・石田・大槻・安井論文は、SSM調査と並行してなされた外国人住民調査の概要を整理したものである。外国籍をもつ日本住民の増加を考えると、これまでどおりに日本国籍の住民のみを対象とした調査はバイアスをうむことが懸念される。本論文では単なる調査結果の概要だけでなく、外国人住民を調査するうえで直面した困難について詳しく解説されており、貴重な方法論的情報を提供している。以上のように、いずれの論文も方法・方法論といった切り口をもちながらも、その知見はそこに留まっていない。執筆者たちの地道で精力的な活動が、思わぬ領域で大きく結実することを期待したい。

2018年3月

保田 時男